

一 祭礼之日所中火之用心之儀九分八厘
由之月行事自身身之上下付
右之通所中不致之相觸以上
九月

寺社之記

万治二亥年十月

於評定新式目之奉命伊豆守美濃守出左
出家元正信後儀之所謂

一 東叡山増上寺傳通院智樂院寺領門前
境内并江戸近邊古代宿所新地家屋相建
備一々由是年

大猷院極濟代院 仰出迎年僧俗令
備之旨于所々々々

一 右之寺院寺領境内并古代宿所新地自今
以後一切借中留為事

一 去々年火事以後新地在佛仕軍旅
来春迄一月で壊れし若子畑を
車引取にて個々事

一 大猷院様御代より新地在佛仕来い軍
多ゆりといふた西事 令出来

公儀に在るに依り余急夜に
右通に作出上り向後役人
相育之業於ましく其所
殿科有東殿山常照院増寺
傳通院代僧二人智樂院代僧二人
伊奈

半左馬助村夜在馬
井上河内与板倉河波
備前与村裁次在馬
行桐石見と列在也

寛文二宮年十月

一 諸出家并山伏所中
今明日中
月仍持判

備座打とふまにひれ相改書上へ
右に通之出家山伏等所六月仍持原野
持町年考方より所へ申す東山少可也
有る爰ひ以上

十月

寛文三卯年十月

是

濟當家被下濟古宗濟條目より自償
毀他最是為法妻、因津論、保等可

割止事と古書に通て夜日蓮宗に因り
此 仰出るる向後三相寺より山若龍遠背
輩名より行形科有るに奈合水知
末流等急度下流志也

二月

同文己卯年七月

定

一 諸社に祢宜神皇末尊学神祇乃西寺致
神祇流に存知有る神事等礼可

- 一 勤之向後於令怠慢之旨に於て神職事
- 一 社家位階位前之旨に於て奏進事
- 一 此等之旨に於て
- 一 每位之社人可名白張之旨に於て其來之旨に於て許状之旨に於て
- 一 付不入之旨に於て
- 一 神社小破之時に於て相意之旨に於て其後之旨に於て附神社之旨に於て掃除之旨に於て
- 一 右條之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て

實文元年七月十日

定

- 一 諸宗法式之旨に於て相礼之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 急度之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 不存一宗法式之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 付之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 本末之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 不存之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て
- 一 禮教之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て其後之旨に於て

不_レ相_レ兼_レ事

一 結_レ徒_レ黨_レ企_レ圖_レ淨_レ不_レ似_レ合_レ事_レ業_レ不_レ仕_レ事

一 背_レ國_レ法_レ軍_レ不_レ來_レ之_レ所_レ於_レ之_レ在_レ無_レ異_レ儀_レ可_レ返_レ之_レ事

一 寺_レ院_レ佛_レ圖_レ修_レ復_レ時_レ不_レ之_レ及_レ其_レ礙_レ事

付_レ仏_レ圖_レ無_レ悔_レ意_レ掃_レ除_レ之_レ付_レ事

一 寺_レ願_レ一_レ切_レ不_レ之_レ賣_レ賣_レ之_レ每_レ不_レ之_レ今_レ貨_レ物_レ事

一 云_レ由_レ緒_レ者_レ隨_レ之_レ事_レ子_レ之_レ重_レ櫻_レ不_レ之_レ出_レ取_レ若_レ其_レ授_レ子_レ細_レ於_レ有_レ八_レ之_レ所_レ之_レ願_レ主_レ代_レ官_レ之_レ相_レ以_レ一_レ任_レ之_レ事

右_レ條_レ之_レ諸_レ宗_レ大_レ之_レ與_レ寺_レ以_レ外_レ先_レ判_レ之_レ條_レ數

亦_レ不_レ之_レ在_レ背_レ之_レ若_レ於_レ遠_レ托_レ之_レ法_レ科_レ之_レ任_レ之_レ

沙_レ法_レ之_レ於_レ裁_レ下_レ知_レ狀_レ也

寬_レ文_レ永_レ享_レ七_レ月_レ十_レ日

條_レ

一 僧_レ侶_レ之_レ衣_レ衾_レ應_レ其_レ分_レ除_レ之_レ若_レ并_レ佛_レ事

作_レ若_レ儀_レ式_レ檀_レ那_レ法_レ之_レ相_レ應_レ任_レ之_レ任_レ

一 檀_レ方_レ建_レ之_レ由_レ結_レ之_レ寺_レ院_レ任_レ職_レ之_レ任_レ

于_レ檀_レ那_レ斗_レ之_レ條_レ法_レ本_レ寺_レ之_レ相_レ該_レ可_レ任

于意以事

一 以令恨ふて校後便に整務事

一 借在家佛檀ふて求利用事

一 他人の勿論親類の好望を以て院坊舎女人

不て拍直に但有東妻帯を以て各別事

右條に下指すに若於遠托志望科に怪重

可有法沙法有依 仰執在物件

寛文五年七月十日

大和 寺

美濃 寺

豊後 寺

雅樂 氏

寛文五年十月

一 借在家佛檀ふて求利用之事

右に通済法度に以る向後町中より出家

山伏願人行人未仏檀捧りしもの若く是

備へて候由分る者出する事取合し其の

了るに以る者出給へる者出年中に拂可

中山正月より拾便を以て相改令遠宵志

を以て在家主が取寄お柳へ者由事可

但初行志を沙書多れ下

一 佛檀法の屋敷留之間に方を限下

一 四芳志出所庇系留を間中浅限下

一 小棟作らる下

一 右ち木作より上の結構を用多ふ下

右堂舎客殿方丈庫裏を外何れも此定

より梁間を法く作らるるは是れを法く

作らるる子細於て寺社奉行より伺はる

差出以上

二月

寛文八申年十月

是

一 新地建立の寺御停止の旨三十八年以前

に作出る事又以後借入る寺地由來

火事より焼失する事 正上之旨寺社奉行

より申渡す旨志右の明地は借入

申すに於て先づ願書之事

一 當春不焼失新地又ハ私田等より

年數より先ず申す旨無但任持方より

明地は借入る旨申す事

以上

十月

寛文三十七年四月

定

黄礫流之帽子衣と云一紛き尚出取方
俣細山付と急夜下是穿穀令之合瑞聖寺
着坊中付之平想黄礫門流、由小く
望戸町中法代宿而小中力之借屋又此地ともあり
辰任、出取於之とも瑞聖寺に相成恒成志の

り一説文九一之黄礫、勿論瑞聖寺相成
紛た系者、のり一系家名、名主、久人組、赤
新相成志、寺社奉行、而、海、之、進、拂、也

四月

元禄元辰年四月

寺院古跡新地之定書

寛永八年辛未年起之、寺院古跡但當辰年迄
六拾八年、成、山、野、申、年、より起之、寺院新地成
也

元禄元辰年四月

元禄四年八月

是

一 古刹相傾地寺社方備流之他作事并化り
出—以成流以成仕百受事

一 寺社門前所居新觀化り以成不及中作り
以事是又堅仕百受以若於相背八門前所
法如—百事

右之通急度一相与以無—於遠背也也

三 為曲事也

八月

同六申年六月

中後之是

一 今夜

嚴有院極十三回漸忌古法事付而此今在
相沙寺社方新地—方以極漸免以自今
以後新地與令信也—也

五月

右之流老中列産牧種ゆ後寺社等乃此渡

元禄五申年七月

光

此今迄有来新地之寺院志涉教之向後
古跡同意之也 以村自今以後新地之寺院
法法信之有也 仰若但此今迄有来新地之寺院
之何定又信之流之有再息之儀并店之
寺院之九之儀之流以法法信之有丁之
于之志之右之流也今迄有来新地之寺院

不及此面之書面之流之相之也 仰出相違
世之流之相之有也 仰出相違

七月

同七戊申年十月

- 一 前之茂相觸以通町中表店之志佛律
類月講之名付種之教之有也 志之志之
唱大勢人集致之儀信之有也 自今以後
流之有信之有也
- 一 町中之表店之借之流寺法社之同帳等

吳家杯之存付物を仕成候旨の傳出若くは
叶候之は存社寺の礼に相付古傳の元
教の事は之候事は轉々致吟味候
終事は之物を致し由人正百連事者如
海は差違次第に仕事

右取置に相付若相付志願之は本人志
不及中家至迄急度曲事一了付迄

十月

元禄二宮年九月

一 今夜所造管は在上野根本中堂に集諸
仕度と存候者も男女共不明な日少茂各
寺々急致集諸は此町中不詳に申す以上

九月

享保三戌年六月

是

一 遊而也 作出事々々候旨今夜新焼
寺院當焼候候候候候候候候候候候
召殺よりちいさく作り給ふ候旨此度候旨

寺院燒失以氣之男敷本何程以故其地
相減何程不修りし中候經處仕立者相
一江波の事

一 昔昔身具方守加片し中候の法せし
以事之為難儀以有守之為事以
事之以終く守之に中候は格本守每觸
とくし守之守之守之以上

六月

享保七宮年四月

万石以上渡
是

熊野三山権現社被守今夜

公儀より御寄附の品より以上を御化

人馬より御寄附の品より以上を御化

之より御寄附の品より以上を御化

費より以上三山の事。御寄附の品より以上を御化

於江戸屋敷に相寄り申度旨存相願儀

願之通也 仰知の上御寄附の品より

一 右三山の事。御寄附の品より以上を御化

歩進之儀下りし事上家中之面町在社
之儀初化之儀事之面交之りし事初化帳
差並江戸屋敷中毎傾月之儀是也此帳
度有下相親以爲無滞格一りし事初化帳
案ハ歩進之儀下りし事上家中之面町在社
押与下りし事初化之儀事之面交之りし事初化
之儀書載之儀事

一 右初化之儀事江戸屋敷中毎傾月之儀是也此帳
度有下相親以爲無滞格一りし事初化帳
案ハ歩進之儀下りし事上家中之面町在社
押与下りし事初化之儀事之面交之りし事初化
之儀書載之儀事

一 傾月之儀此集以分ハ江戸屋敷中毎傾月之儀是也此帳
度有下相親以爲無滞格一りし事初化帳
案ハ歩進之儀下りし事上家中之面町在社
押与下りし事初化之儀事之面交之りし事初化
之儀書載之儀事

一 上方向歩進之儀事上家中之面町在社
之儀初化之儀事之面交之りし事初化帳
差並江戸屋敷中毎傾月之儀是也此帳
度有下相親以爲無滞格一りし事初化帳
案ハ歩進之儀下りし事上家中之面町在社
押与下りし事初化之儀事之面交之りし事初化
之儀書載之儀事

四月

万石以上の領地の簿書

先

一 万石以上の領地を寺社領に分けしむる事

寺社領を万石以上の方高に之し事

一 万石以上の領地を村に併合し其の村に併合する事

併合するに依り又分ちしめて其の寺社領に

併合する事

併合するに依り村を併合する事

一 万石以上の領地を併合し其の村に併合する事

併合するに依り又分ちしめて其の寺社領に

併合する事

併合するに依り又分ちしめて其の寺社領に

併合する事

併合するに依り又分ちしめて其の寺社領に

併合する事

以上

四月

大同封
古月封

初テ条万石以上は重公通因文云云条目より左に
一苗表屋敷より左に三山に宗相より初化に成
下り左に千石外に支配より左に千石外に支配
組中より支配より左に千石外に支配より左に
相見に宗相仕度者右三山に宗相下り左に宗相
宗相の宗相より左に千石外に支配より左に
左に千石外に支配より左に千石外に支配より左に
左に千石外に支配より左に千石外に支配より左に

一右初化相事一苗表屋敷に月より同封と云
三山に宗相より左に千石外に支配より左に
一右初化相事一苗表屋敷に月より同封と云
初化相事一苗表屋敷に月より同封と云
右に宗相仕度者右三山に宗相下り左に宗相
宗相の宗相より左に千石外に支配より左に
左に千石外に支配より左に千石外に支配より左に

四月

奉細書初化之状、書裁之、以爲之、有之、好
未之、者、之、心、以、遠、之、格、之、下、中、觸、合、代、安、
下、中、一、同、事、

一、初、化、令、全、集、以、儀、拜、之、而、之、儀、之、以、之、
法、代、官、向、安、之、を、相、定、部、派、不、改、格、常、付、
向、編、自、代、本、之、由、近、私、由、加、南、一、貴、儀、不、任、意、度、
九、斗、以、格、之、中、一、付、事、
右、之、法、代、官、之、中、一、派、以、上、

四月

享保七宮年九月

此、度、緒、宗、本、寺、より、徳、寺、院、に、控、書、指、出、
依、之、自、今、法、事、之、旨、ハ、勿、論、爲、之、一、餐、意、未、
然、く、之、九、斗、以、格、儀、家、事、之、儀、未、一、仕、方、
之、好、之、者、ハ、公、熱、而、法、事、と、始、之、外、寺、院、小、
子、合、以、儀、之、中、一、控、之、儀、取、合、以、而、下、格、以、爲、
之、以、相、在、以、上、

九月

同十己年九月

南、部、真、福、寺、焼、失、之、伽、藍、造、之、之、付、緒、因、

初化事一宗院古門仍大宗院古門仍より
公儀の相願の付る今度初化の儀は
仰出候

公儀若涉寺附の品より依て法大の品
古儀布の品は且寺社所方より所料初願
圓に在る品は成無福寺御造之初化
成儀寺の借来春より巡行候一可
相進の品は存候志の案より寺に候
下より品は備志より若し押白より候
候く無用の初化の状を言裁候以上

九月

享保十巳年十二月

出雲國大社造當の所は法圓初化事今度
社家の志は相願の通に仰出候
公儀より品は涉寺附の品より依て法大の
古儀布の品は且寺社所方より所料
初願の品は存候志の案より寺に候
下より品は備志より若し押白より候
候く無用の初化の状を言裁候以上

白編志を以て志を撰りしものにして其
用は物類化之状を記載ししに
上

十月

享保十年十月

南都無福寺物類化後僧令巡行各
以是世夜一宗院大寺院古門全然
相類しし向より物類化不仕進
了りし西國
物類化大坂物類化不京物類化
又六向等次第無福寺物類化不
園東物類化

當地物類化所は後僧相詰し
る事場所は可
及是は物類化後
實東物類化
不京物類化
來未正月より十月と上方物類化
申出月より
十月迄は相類し
白編志を以て
撰りしもの
にして其用は
物類化之状
を記載しし
に上

十月

同十三年十月

一 於在る所は神事佛事
を以て名依何事

新觀之儀嘗不之建若無柳子細之
寺行而又六地取之相在也但為高僧合之
傾之也少小習之由新品不仕也
右之區嘗以相嘗之遠背之等之
右之區嘗以相嘗之遠背之等之
右之區嘗以相嘗之遠背之等之
右之區嘗以相嘗之遠背之等之

十有
享保十三申年九月

是

地神經續音月官位院号如表沙表之也

涉停以織先年也 仰出以表又小在玉之
櫻小成之古之古者向後在之而之玉之
み之玉小之古之古者向後在之而之玉之

九月

右之區嘗以相嘗之遠背之等之

同十文成年四月

中渡

一 仁和寺法門法座形向法所後為助力
涉當地於護國寺三之年之間正又九月

昆沙門天宮實儀古願之文相海集
世言より始る町中右左記三相記出計有
名方より町より深松より中葉の望
四月

享保十三年十月

河判参田八幡宮修嘗付向江戸又炭田
初化之事今度社僧共相願以通
仰出
公儀より御寄附の事より依江戸

諸本在法務中一面之法家中寺社町方
又費用に立て而御料私願共初化儀
来春より社僧共巡行三相初化名志
前進より白編志者六押白初化
費用より初化儀之書裁に条に存
于此以上

十月

右通三々相願

同奉十月

先

一 按別天王寺修補付白諸國勅化之事之度
 社僧共相願以通旨 仰出
 公儀よりも 所寄附の事も依緒各等
 古旗布の面も且古社所もそ外所料私願
 國々在の所も初化の所社僧共奉養より
 巡行しつゝ 一初化の所存の所志の事志
 考を以て候りまふに勿偏志なき者押白
 初化儀等所用の程初化の状書類の事
 一 社僧共法皇巡行の旨在の所も人馬滞

寄る程所料は古代宿私願に領する地所より
 一 諸國巡行初化後、以中不勝の
 場不ハ至而く事行而古代宿領する地所
 九集の儀相願初化に於て所寄附の儀
 後度有相願の事右通の事

以上

十二月

右通の相願の事

享保十七年六月

京六孫王社之儀

公儀より古所復す 仰付古所復料を

江戸多敷事以右社之儀元禄年中

濟建之旨 仰付新親因經之社所且家之

助力等由是之旨相續し給へり度計度

清和源氏之方石以上之輩に遍照心院南谷

勅化相親公等之旨助力多し給へり度計度

之相違ひ有志次第助力を

右之通奉へ之旨奉り上

育

同年閏二月

先皇御相在り京六孫王社別當遍照心院

南谷勅化之儀古所復す之旨清和源氏之方

之相違ひ有志次第助力を

難成之旨有御支配之旨相違ひ有御支配より後

世活志次第より勅化奉り給へり度計度

奉寄申支配奉合之事古所復す之旨

後世活し給へり度計度

右通改支配を以て之を以て

国分月

享保十七子年六月

中渡

一南於真福寺伽藍造之為勛力淺更親を
地中お扱わし十月年三月七月十月
昆沙門天富突江 仰付度有一寺院は
大乗院はつはは通相海を候中渡東月
廿二日より始り候中若如乱小可存公

考く申し候との由事候右に相
候旨各方より町々不濟候事申上

六月

同十八七年三月

中渡

仁和寺

浄門初

右富実公今迄に復國を九月廿三日致候
以り當年来六月より申年正月迄深川
永代寺境月々公今迄に毎夜候以

二月

享保十八年七月

延別三福大明神

神主

三福大明神社小破修復之由元金三百兩
海備正 作付公右海備金三百兩是別法代官
每歲取六部正相渡の百兩朱沙金百兩
解裁取六部正の取合に百兩格取解し金子
在方は借付の者にて右に十年の利金にて十年

修復相渡は給ふに利金より修復の多きは
元金に相渡るべきは元金に利金にて十年
修復入用解りし元金に相加借附は格可
仕有出勘定奉行より取合前の中渡は別法代
所中渡右の神主且取合前より借付は
下

但右海備金三百兩を寺社法修復除金角
海備正 作付公右海備金三百兩は
法代

七月

七月

元文三年二月

河別卷田八幡宮先年享保十二年

公儀より御寄附ありしに上戸又兼月

初化に 仰付ありし初化物集り兼未正

迂宮不調お付今度新法園初化

御免に御寄附の寄り物のみ少ししに

手不限り意し今明年中迄寄り物ありしに

仰付今度八諸國巡行不致の御寄附に

近代官私地改并寺社願者も在りしに

近代官地改并集戸八南本所法船務並大坂

豊後町初化不迄し是裁以先在る相觸

以通志書し志六押白初化後集り為相觸

右通し相觸に

二月

同奉四月

近年法寺院根、寺寺、本寺、什物佛具等

達具等書入又志書後、此文を以全根後

備用寺院敷多之、不増し向存右之品質入
或賣渡院文を以全根被備用い由今勿論
院人進も吟味之上意度可付い充金を
候。右之品貨物に或賣渡院文を以全金を
借し以取不借之件金子海方、或海方は
向後、海方中付る候。

四月

元文己未年六月

古勘定奉行

本所

雁漢寺

結制去、年去年も令執行候事、又此以後
打渡院行難成候身、或土方并実八別初候候
相親候、其候に難成事、候に結制之事、
宗持中一、候に候に渡院行度候事、
寺に檀越も、無、候に候に中上、又今般
法米之、儀、下、並、高、冬、結制、一、其、相、勤、
右、法、米、之、余、多、心、又、己、未、年、月、一、度、相、勤、
此、後、之、結、制、絶、不、可、相、勤、候、
佛、腰、為、掛、候、寺、之、候、付、別、院、を、以、右、通、
法、米、之、下、並、

右通大是裁前中一渡以百三上後の

六月

一河原卷田八幡宮初化集業以元文申年六月再觸去々々年々々再相觸

寛保元酉年十月

諸宗之寺院本末編或録及在階法系任番世牌等子外法我掛り公事訴訟と子録所觸取本寺等々逐一是吟味依依具八頁之令裁取事に中付と致遠宵不相結り外中付と及難深の八

奉行所は下各公吟味之上意度下中付の
右他宗又ハ俗人の掛り出入公今迄之趣ハ
流當下各公ハ

右通諸宗一流三相公ハ

十月

一寛保二戌年三月按別天王寺再初化相觸

寛保二戌年四月

一世上葬礼長令根張或ハ及張去中ハ埋捨
此等々各々ハ依ハ然ハ俗者ハ依各々相公ハ
加々々々々々ハ身中付ハ寺院より右各々々

乃理奈く且方其に統帥せ向後古中に埋り
相止さうせに様

右に通所くは中間せ相出指しに様

二月

寛保二戌年五月

西云別日古傍

三位 掾 校

出雲國 因幡國 伯耆國 播磨國 備前國

安藝國 石見國

右社及大破之付末亥年々々々々右由之初化古免是迄

夏乃三信明神主

矢田初伊織

伊豆國 後河内 甲斐國 相摸國 武藏國

上野國 下野國

右社及大破之付尚戌年々々々々初化古免

大塚 護持院持僧心

右筑波山社堂及大破之付尚戌年々々々々及陸一國

初化古免

南都西大寺

全別院

山城國 大和國 河内國 和泉國 播磨國

右柳屋再息村当戊戌六月季三月迄右迄初化法免

田別兼并 拾捌 右社務

多田温波病家代

多田如研

山城國 大和國 河内國 和泉國 拾津國

右当社修儀付去丙八月より来亥十二月迄穉粉守
能一右之國々初化法免

遠列一宮神々

鈴木弾正

左之國 後河内 三河内 信濃國

同列天宮神々

中村左京

左之國 後河内 三河内

右当社修儀付去丙十月より当戊戌三月迄右之國々
初化法免

寛保二戌年六月

古勘定寺行石

遠別豊田郡二候村

清瀧寺

右清瀧寺相願也

信原極淨廟并淨位碑所及大破自力之経
叶之身之志別後列之石之今國初化古免事
公儀より願之通言 仰付以如願之事之自分之
初化之仕之勝之次第之由右大破之由之付全
百重之下の向後
公儀より出接之之る要之由淨佛供料之
日を以多くのけ並修儀仕給之り後
右之通中渡之由寺社修儀料金之由より
之相渡之

寛保戊午年正月

諸國寺社修儀爲助力初化浄免之上
寺社修儀之由平之初化状持系淨料私儀
寺社願之由渡巡行の寺社之業只今また
村方より初化浄免之旨地所より中渡之
由初化浄免之由中渡之旨地所より中渡之
私之初化相箇儀之由願之旨地所より中渡之
公儀浄免之上諸國巡行之事之由系之社修儀
之由初化状持系之由寺社之業之由志次之
之由初化浄免之由淨料之由代官私願之由地所
之由之由中渡之旨地所より

右之通一と相觸

寛保三亥年三月

濃州南宮神主

惣一代

美濃國 通一國 伊勢國 尾張國

加賀國 越前國 飛騨國

右社及大破舟當亥年三月年迄右國一物化
涉免

系

東福寺

右伽藍及大破舟當亥年三月より同三月まで

山内一國物化涉免

同年四月

上野國新田郡佐位郡山田郡物田郡新田郡
安藝郡武芸郡美濃郡新倉郡相模國
高座郡深谷郡北甲郡大井郡陶湊郡
足柄上郡下総國葛飾郡村ヶ崎郡神子
所野郡津佐郡東上郡又子郡以右郡村々
境三村不割之札相建様多非人其番舟並
神子所野村田出入名符致以修仍計之哉

吾一流仲男親類縁志より通話
不相成申相関以神子修治之觸及より
振之修治札渡並縁及縁之より条あり
之通修束之為致し若又修治事考思
致しより之海あり事
右之加濟科私取之向歩法代官より再建
下より

四月

右之通より相觸

寛保三亥年八月

大和國之福明神
神主代
高宮民助

山城 近江 河内 摂津 和泉 伊勢
右社及大破舟来子年不宮年迄右之國之初化
涉免

同年八月

滋織法臨寺堂舎大破舟今度但先親例
徳回初化

論者亦不盡其理

公儀昔古根原山に上りて爲初化儀必巡行して
若く是より脚多敷事り年月を經て都而
修造する爲不相成郡儀事奉り存於江戸
屋敷に相中り度合相款に依り願て通
仰出山旨に存す所也

一 高表屋敷に於ては法橋寺住持相也初化儀
下り在りて不取支配を以てて其支配を
組中支配に面し并に家來迄に初化帳迄
以相仕度有法橋寺に以る事進儀に

一 妾細初化儀狀書載る事

一 初化相事奉來子奉中進法橋寺文に相
仕度有下り事

一 万石以下に面し知り不に向ふ法儀に初化帳
差込事加茂法代官中より其旨に事

一 初化相儀系款に法橋寺自坊当地に深川
永代寺地中初化所と法古下事

右に相向に相事有相一法儀に

分

寛保三亥年九月

京清水寺

成乾院

山城大和河内和泉 抄澤

右伽藍修復之件奉于正月より奉_レ宣_レ十二月迄

右之國_ノ勅化_ノ免

宗旨之教